後漢末の大儒鄭玄（ジョウゲン）の説が殆んど絶對的な權威をもつていた。しかも時代の變遷とともに、自ら異説の現われることを避け得なかつたばかりでなく、經の本文にさえ異同を生じるようになり、これが極點に達した南北朝時代には、南學・北學の間には所依の經文においても、その注釋においても、截然たる區別が見られたのであつた。簡單に言えば、北方では殆んど純然たる鄭學であつたのに反して、南方では魏晉以後、主として老莊思想の立場から、鄭説に反對を唱えた王肅や王弼（オウヒツ）などの説が重んじられていたのである。

かくて隋の統一以後になると、北方の學者で南學を兼修するような者も次第にできて來たが、やがて唐の太宗が顔師古（ガンシコ）に命じて經文の統一を、孔頴達（クエイタツ）に勅して經義の統一を圖らしめるに及んで、遂に南北兩學の統一が成り、兩漢以來の經學の發達は、ここに一應完成を告げることになつたのである。しかも、五經の宗本を作るに方つて、顔師古の據つたのが大體江南本であつたに違いないと思われる一方、その五經正義に孔頴達が採用したのは、殆んどつねに南學の説であり、止むを得ないで鄭説に從つた場合においてさえ、故らに北學を抑えて南學を揚げる態度を示していることは、結局如何なる基礎の上に、南北兩學の統一が行われたかを物語るものに外ならない。

當初必ずしも學界の全面的な賛成を得なかつたにも拘らず、欽定の經文とその注釋とは、官學の教課や科擧の官吏登用試驗を專らこれに據らしめた結果、比較的容易に經學の統一という、所期の目的を達することはできたが、その反面、學界の沈滯を招くに至つたことは否定し難い。一方、文學の流行に壓倒され、科擧試驗においてさえ經學を中心とする明經科は廢れて、獨り文學を中心とする進士科のみが榮えることになつた。もつとも唐王朝が、安